

令和 元 年 6 月 21 日現在

機関番号：32647

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16703

研究課題名（和文）＜9・11＞以降の米現代小説における「家庭性」表象の諸相

研究課題名（英文）Representation of Domesticity in Post-9/11 American Novels

研究代表者

並木 有希（Namiki, Yuki）

東京家政大学・人文学部・准教授

研究者番号：90626194

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000 円

研究成果の概要（和文）：現代アメリカ文学における「災害後の都市における家族」というテーマを理解するため、特に＜9・11＞以降のニューヨークを扱った文学作品を中心として調査を行った。政治的・社会的な装置としての「Domesticity（家庭性）」についての諸議論を整理した。それと同時に、物理環境と個人的な体験をつなぎ再編成させる動きを理解するための鍵概念となるAffect理論について広く調査し、関連文献をまとめた。この枠組みを使用して現代アメリカ小説におけるニューヨークの表象を見直し、家族の再構成と都市の再発見の流れを俯瞰した論考を国際学会で発表し論文として発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は現代アメリカ文学と文化における「家族」関係とその諸相を明らかにする取り組みの初頭となるものである。この代表者が行なっている近現代アメリカ文学における個人と都市の関係に乗っ取りさらに進めるものであり、断続性と連続性に着目している。また、都市と災害という関係に置いて、日本の事例にも注目し国外の研究者と協働したことで、海外の文脈において日本の事例を位置付けることにもなった。

研究成果の概要（英文）：This research explores the forms and implications of “family” in the post-catastrophic society, as represented in contemporary American literature, with a special focus on novels that center around the experience of the 9-11 terrorist attacks. First, I researched the theories and discussions on “Domesticity” in modern American literature, where the concept has importance as a political and social instrument to define personal space and confinement. Second, I investigated the affect theory to redefine urban space as an agent of an individual’s emotions and actions. Arguments and readings of contemporary American novels are presented within this context in order to examine the emergence of a new form of “families,” or a personal bonding between individuals, reconfigured and rediscovered in this post-family era. Papers are presented at international conferences and are now being printed for publication.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：現代アメリカ文学 近代アメリカ文学 都市文学 災害と文化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

今まで「アメリカ都市文学」すなわち、19世紀後半から20世紀初頭のアメリカ合衆国において発展した近代都市と、そこにおける個人の経験を主題としたリアリズム文学の形成と発展の過程を研究してきた。特に都市が未曾有の変化と発展を遂げた1865年から1945年頃のニューヨークに注目し、変化する都市の建築、特に摩天楼群が作り出した特異な都市空間がどのように知覚され表象されてきたかを、小説を中心に他メディアの都市表象と関連付けながら考察した。都市文学は近現代米文学に中心的なジャンルであり、先行研究も多くあるが、形式（リアリズム・自然主義等）または主題（移民文学等）の下位分類として扱われることが多い。当研究はこのジャンルを再検討し、都市空間の変化とその表象の移り変わりの関連に焦点を当てることにより、形式・主題・メディアを横断した文化研究の可能性を模索する。物質的な環境構成と社会的環境の相関関係については文化地理学に端を発しL. レッシングのアーキテクチャー論など現在の人文学研究において重要課題である。極めて人工的な都市で複雑に発達した近・現代ニューヨークの文化の諸相を総合的に捉えるにはこのアプローチが最も有効である。これまでの研究で、21世紀ニューヨーク都市小説の空間表象に顕著な新傾向は、「都市＝コミュニティの破壊を受けての最小単位としての「家庭」の再構築の試み」として捉えられることが明らかになり、この特徴をさらに精査することで現代都市小説を正確に理解できるという発想を得た。

また、併行して、東京家政大学人間文化研究所の「災害と生活学」プロジェクトに参加し、岩手大学・福島大学・デラウェア大学災害研究センターとの共同研究のうち「災害と文化」の研究を担当した。デラウェア大学社会学部T. ワクテンドルフ准教授と共に、日本の災害経験の文学表現の基礎研究と共に、東日本大震災による被災・避難の経験にまつわる文化表現、特に「記念碑」を中心に研究を進めた。このプロジェクトで、都市と災害について新しく比較文学的研究の視座を得て、災害が個人・共同体の空間知覚に与える影響とその表象についての考察の緒を得た。これらの視点から、現代ニューヨーク都市文学における新潮流である〈9・11〉後の都市表象、特に「家族を最小単位とする共同体の立て直し」に関する物語の諸相を研究主題とした。この小説群理解の鍵概念である「Domesticity（家庭性）」を広く調査し、他の場所の災害を扱った作品などとの共通点、相違点を見ることで、「共同体・個人の経験と物理的な都市の表象とが分かちがたく結びついている」という近代から続くニューヨーク都市文学の特殊性の現代的展開を最も良く明らかにし、また災害を扱った文化表象に共通の特徴を見ることができるといふ仮説を持った。

2. 研究の目的

21世紀米都市小説における中心的主題である「Domesticity（家庭性）」について研究する。社会が多様化するにつれて、伝統的にはジェンダーや社会的・政治的要請と強く結びついていたこの概念が再定義されている。特に、災害・カタストロフィーという強度を持った経験を経て、個人的・内省的・セラピー的な家族のあり方がコミュニティの最小単位として見直され、都市小説の主題となっている。このことについて、〈9・11〉テロ事件後のニューヨークを扱った小説を主な題材として調査する。その際、今まで行った近現代ニューヨーク小説・災害と文化の研究で得た環境と共同体のナラティブの形成についての知見を踏まえ、近代との「継続と断絶」について他メディアとの関連において調査し、21世紀のDomesticityの諸相と特徴を明らかにする。

3. 研究の方法

以下の2点の調査主題に関して、現代アメリカ都市文学を調査する。

1. Affect（情動）の場としての家庭・共同体・都市

当該テーマを理解するために必要な理論的枠組みを設定する。第一に、これまでのアメリカ文学におけるdomesticityに関する議論について文献を精査し、近代アメリカ小説の研究史内に位置づける。そして、災害による個人の体験とそれがもたらす社会の変化を理解するため、E. セジウィックによる情動の文学理論家と、N. スリフトらによる、情動を中心とした人文地理学的な都市理解についての基礎文献を整理する。

2. 喪失を経た都市における「家庭」の諸相

< 9・11 > から 10 年を経て、事件を主題とし、都市空間の破壊に重ねて集団と個人の喪失の経験を物語る作品が多く発表された。上記の枠組みを用いて、21 世紀転換期のニューヨーク小説を中心に調査する。第一に、新潮流である個々人の「ポスト・コロニアル・ニューヨーク小説」について、その諸相を整理し考察していく。第二に、それらに見られる家族の再構成の中試みで特徴的な「自閉的な母と息子の関係」という主題について考察する。

4. 研究成果

現代アメリカ文学における「災害後の都市における家族」というテーマを理解するため、特に < 9・11 > 以降のニューヨークを扱った文学作品を中心として調査を行った。アメリカ文学・文化の発展と共に形成された、政治的・社会的な装置としての「Domesticity (家庭性)」についての諸議論を整理した。それと同時に、物理環境と個人的な体験をつなぎ、変化させ、再編成させる動きを理解するための鍵概念となる Affect 理論について広く調査し、関連文献をまとめた。

(1) 近代アメリカ文化における家族表象に関する文献の基礎調査を基とし、ニューヨークを舞台としたアニメーション作品 *Mr. Bug Goes to Town* (1941) を題材として、成長する都市と重なる形で変化する家族の表象について論文をまとめた。(論文)

(2) 東日本大震災被災体験に関する女性のライフストーリー収集調査 (平成 26 年度東京家政大学大学院プロジェクト) を、本研究の調査で得られた、個人とコミュニティの喪失の経験という文脈から再考した。エピソードに現れた、様々に変化しながら災害からの復元を遂げる「家族」の概念を比較する研究を行い、学会で発表した。(学会発表)

(3) Affect 理論に関する文献の基礎調査を基とし、1940 年代のニューヨークを題材として個人の欲望と物理的な空間が混じり合った作品を書いた特異な作家、Ayn Rand のニューヨーク小説における都市表象を、繰り返される建設と破壊の暴力性の親和性というモチーフに注目して論文にまとめた。(論文)

(5) 「母親と息子の自閉的な関係」という頻出主題に注目し、H. デウィットの *The Last Samurai* (2000)、J.S. フォアの *Extremely Loud and Incredibly Close* (2005)、D. タールトの *The Goldfinch* (2013) などに見られる、緊密な母と息子の関係を展開した形で、新しい家庭と都市を規定しなおす動きについて論考した。教養小説の現代的発展系の例として国際学会にて発表し、現在同テーマのアンソロジーとして出版準備中である。(学会発表)

(6) 本研究の成果を教育に生かすために、CLIL 理論を援用した学部教育用の教材を作った。世紀転換期のアメリカ都市文学、特に Theodore Dreiser や Edith Wharton の作品を題材として、都市の地理と家庭性の関係で読み直した。リアリズム文学における女性の就労と都市移動をインタラクティブな地図を使って学ぶアメリカ文学史の教材と授業について、国際学会で発表した。(学会発表)

(7) Post-Family の諸理論に関する調査を行った。この枠組みを使った試論として、今までのニューヨーク都市文学の災害表象に関する表現の中にある、突発的な暴力、感情の交換、家族と都市の再構成 をテーマとし、チャーリー・カウフマンの映像諸作品、特に *Synecdoche, NY* における都市表象と家族の再建の物語としてまとめた。(論文)

本計画は別の計画（科研費番号：24720123）の発展として構想されたため科研費から旅費を支出しての海外調査・学会発表を予定していたが、妊娠・出産に伴い海外渡航が不可能となった。そのため、一部研究計画と研究費使途を変更した。また、当初の2年計画を4年に延長した。（平成28年1月8日より3月31日まで特別休暇取得、平成30年3月まで時間短縮勤務）これらの理由から、以上の研究成果は部分的に科研費以外の経費が支出されているものを含む。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

並木有希、Charlie Kaufman のニューヨーク映画における家族の空間、英語英文学研究、査読有、Vol.25、2019、印刷中

NAMIKI, Yuki、City as an Arena of Power-- *The Fountainhead*(1943) as a New York Novel、英語英文学研究、査読有、Vol.24、2018、pp.15-33

NAMIKI, Yuki、The Romantic Edifice : Representation of Urban Space in *Mr. Bug Goes to Town*、英語英文学研究、査読有、Vol.22、2016、pp.7-12

〔学会発表〕（計 3 件）

NAMIKI, Yuki、Effective Application of CLIL theory to a Japanese ESL Literature Course、54th RELC International Conference and 5th Asia-Pacific LSP and Professional Communication Association Conference、2019

NAMIKI, Yuki、The Figure of the American Family in *The Last Samurai* and *Extremely Loud and Incredibly Close*、The Bildungsroman: form and transformations Conference、University of Sydney、2018

NAMIKI, Yuki、All in the Family: Trauma, Resilience, and Shifting Identities in Life Stories on The Great Eastern Japan Earthquake、2017 International Conference on Life Writings、Department of Humanities, Kaohsiung Medical University. 2017

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者（なし）

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。